

麻疹（はしか）と風疹

麻 疹（はしか）

ニュースや新聞記事などで御存知の方もあるかと思いますが、関東地方を中心に“はしか”が流行しています。小児ばかりではなく、大学でも集団的に発生しているところがあります。

(http://www.soka.ac.jp/news/headline_news/2007/20070418.html)

はしか（麻疹）は、発熱と発疹を主徴とするウイルス性発疹性疾患で、免疫がない人が暴露を受けると殆ど感染・発病します。麻疹は感染力が強く、通常、飛沫核（空気）感染します。麻疹は小児ばかりでなく、成人の発症例も多く、入院を要するような重症例が多いとされています。従来は、一度ワクチン接種を受ければ終生免疫が持続し、一生罹患しないとされていましたが、ワクチンの効果はおよそ10年程度で低下することが明らかになってきました。これは以前に比べて患者さんの数が減り、ウイルスに遭遇する機会が減少したため、ワクチンの効果を増強することができないことが原因と考えられており、大学生でも一度麻疹に罹った人や、既に2回ワクチン接種をした人を除いて、誰でも罹る可能性があるという状況になっています（40歳以

下の若手教職員も同様です）。昨今の伝播は、人込みでもらってくる（デイズニーランドに行ったなど）、旅行中に先でばらまく（首都圏から友人が遊びに来た）、あるいは通学ルートに沿って拡大するなどとされています。

麻疹は、感染後に10-12日の潜伏期を経て発症します。38℃前後の発熱が2-4日間続き、倦怠感があり、上気道炎症状（咳嗽、鼻漏、くしゃみ）と結膜炎症状（結膜充血、眼脂、羞明）が現れ、次第に増強します。この時期にコプリク斑とよばれる特有の小斑点が口腔粘膜に出現します。コプリク斑が出ない場合、この時期の診断は困難とされています。その後、発熱が1くらい下降して半日後に、再び高熱（多くは39.5℃以上）が出ると共に（2峰性発熱）、特有の発疹が耳後部・頸部・前額部より出現し、翌日には顔面・体幹部・上腕に及び、さらに四肢末端にまで広がるまで3-4日発熱（39.5℃以上）が続きます。稀ですが、時に肺炎あるいは脳炎を合併し致命的になることもあります。

特異的な治療法がなく、高度弱毒生ワクチンによる予防が最も重要です。母体由来の抗体がほぼ消失する、生後12-24カ月に1回目の接種を行います。さらに上記のような理由で、2006年からは、小学校入学前1年間に2回目のワクチン接種をすることが推奨されています。ワクチンによる免疫獲得率は95%以上と報告されています。

以上のことから、現時点での注意事項をまとめますと、

1. 麻疹は子供の病気ではありません。また、肺炎や脳炎など重症化する可能性もあります（成人でも死亡者が出ています）。

2. 予防接種を1回も受けたことのない人はすぐに予防接種を受けましょう。1回は受けた人（現在の大学生の大部分）も10年経過している場合罹患する可能性があります。できれば追加接種をしておきましょう。

3. 40歳以下で連休中に首都圏に遊びに行った方などで、10-12日後に37.5以上の発熱をきたした方は麻疹に罹患している可能性があります。大学には登校しないで、すみやかに医療機関を受診してください。受診前に“はしか”の疑いであることを医療機関に電話で伝えてください。

4. はしかに罹る可能性があるのは、
過去に“はしか”にかかったことがない
40歳以下
予防接種を1回しか受けていない
人込みに出かけた人、首都圏に出かけた人は特に要注意です。

風 疹

風疹は、発熱、発疹、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹症の1つで、特に、先天性風疹症候群予防のために、妊娠可能年齢の女性に対するワクチン接種が重要と考えられる疾患です。

感染から14-21日の潜伏期間の後、発熱発疹、リンパ節腫脹（ことに耳介後部、後頭部、頸部）が出現します。疹は紅く、小さく、皮

膚面よりやや隆起して全身に拡大します。リンパ節は発疹の出現する数日前より腫大し、3-6週間位持続しますが、基本的には予後良好な疾患です。

風疹に伴う最大の問題は、妊娠前半期の妊婦の初感染により、風疹ウイルス感染が胎児におよぶために、先天異常を含む様々な症状を呈する先天性風疹症候群が高率に出現することにあります。先天性風疹症候群の主な症状は先天性心疾患、難聴、白内障です。

風疹を予防するために、弱毒生ワクチンが実用化され広く使用されています。我が国では従来、中学生の女子のみが風疹ワクチン接種の対象でした。その後、紆余曲折を経て、平成18年の予防接種法改正に伴い、生後12-24カ月および小学校入学前1年の男女に、風疹ワクチン接種が勧奨されています。

風疹に対する免疫を有しない女性が妊娠した際に風疹の初感染を受ければ、先天性風疹症候群発生の危険性が高いことは明らかですから、自分自身の風疹抗体の状況を把握し、積極的にワクチンで免疫を獲得しておくことが望ましいと考えられます（なお、ワクチン接種後2ヶ月間は妊娠を避ける必要があります）。

このような事態に鑑み、保健管理センターでは、麻疹と風疹の抗体検査を実施します。

大津キャンパス

6月7日(木)・8日(金) 12:00～16:30

彦根キャンパス

6月5日(火)・11日(月) 12:00～16:30

医療機関で麻疹（はしか）の診断を受けた場合は、速やかに保健管理センター（分室）に電話で連絡してください。

保健管理センター（彦根） 0749-27-1024

保健管理センター分室（大津）077-537-7709

麻疹（はしか）と風疹

麻 疹（はしか）

ニュースや新聞記事などで御存知の方もあるかと思いますが、関東地方を中心に“はしか”が流行しています。小児ばかりではなく、大学でも集団的に発生しているところがあります。

(http://www.soka.ac.jp/news/headline_news/2007/20070418.html)

はしか（麻疹）は、発熱と発疹を主徴とするウイルス性発疹性疾患で、免疫がない人が暴露を受けると殆ど感染・発病します。麻疹は感染力が強く、通常、飛沫核（空気）感染します。麻疹は小児ばかりでなく、成人の発症例も多く、入院を要するような重症例が多いとされています。従来は、一度ワクチン接種を受ければ終生免疫が持続し、一生罹患しないとされてきましたが、ワクチンの効果はおよそ10年程度で低下することが明らかになってきました。これは以前に比べて患者さんの数が減り、ウイルスに遭遇する機会が減少したため、ワクチンの効果を増強することができないことが原因と考えられており、大学生でも一度麻疹に罹った人や、既に2回ワクチン接種をした人を除いて、誰でも罹る可能性があるという状況になっています（40歳以

下の若手教職員も同様です）。昨今の伝播は、人込みでもらってくる（デイズニーランドに行ったなど）、旅行中に先でばらまく（首都圏から友人が遊びに来た）、あるいは通学ルートに沿って拡大するなどとされています。

麻疹は、感染後に10-12日の潜伏期を経て発症します。38 前後の発熱が2-4日間続き、倦怠感があり、上気道炎症状（咳嗽、鼻漏、くしゃみ）と結膜炎症状（結膜充血、眼脂、羞明）が現れ、次第に増強します。この時期にコプリク斑とよばれる特有の小斑点が口腔粘膜に出現します。コプリク斑が出ない場合、この時期の診断は困難とされています。その後、発熱が1 くらい下降して半日後に、再び高熱（多くは39.5 以上）が出ると共に（2 峰性発熱）、特有の発疹が耳後部・頸部・前額部より出現し、翌日には顔面・体幹部・上腕に及び、さらに四肢末端にまで広がるまで3-4日発熱（39.5 以上）が続きます。稀ですが、時に肺炎あるいは脳炎を合併し致命的になることもあります。

特異的な治療法がなく、高度弱毒生ワクチンによる予防が最も重要です。母体由来の抗体がほぼ消失する、生後12-24カ月に1回目の接種を行います。さらに上記のような理由で、2006年からは、小学校入学前1年間に2回目のワクチン接種をすることが推奨されています。ワクチンによる免疫獲得率は95%以上と報告されています。

以上のことから、現時点での注意事項をまとめますと、

1. 麻疹は子供の病気ではありません。また、肺炎や脳炎など重症化する可能性もあります（成人でも死亡者が出ています）。

2. 予防接種を1回も受けたことのない人はすぐに予防接種を受けましょう。1回は受けた人（現在の大学生の大部分）も10年経過している場合罹患する可能性があります。できれば追加接種をしておきましょう。

3. 40歳以下で連休中に首都圏に遊びに行った方などで、10-12日後に37.5以上の発熱をきたした方は麻疹に罹患している可能性があります。大学には登校しないで、すみやかに医療機関を受診してください。受診前に“はしか”の疑いであることを医療機関に電話で伝えてください。

4. はしかに罹る可能性があるのは、
過去に“はしか”にかかったことがない
40歳以下
予防接種を1回しか受けていない
人込みに出かけた人、首都圏に出かけた人は特に要注意です。

風 疹

風疹は、発熱、発疹、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹症の1つで、特に、先天性風疹症候群予防のために、妊娠可能年齢の女性に対するワクチン接種が重要と考えられる疾患です。

感染から14-21日の潜伏期間の後、発熱発

疹、リンパ節腫脹（ことに耳介後部、後頭部、頸部）が出現します。疹は紅く、小さく、皮膚面よりやや隆起して全身に拡大します。リンパ節は発疹の出現する数日前より腫大し、3-6週間位持続しますが、基本的には予後良好な疾患です。

風疹に伴う最大の問題は、妊娠前半期の妊婦の初感染により、風疹ウイルス感染が胎児におよぶために、先天異常を含む様々な症状を呈する先天性風疹症候群が高率に出現することにあります。先天性風疹症候群の主な症状は先天性心疾患、難聴、白内障です。

風疹を予防するために、弱毒生ワクチンが実用化され広く使用されています。我が国では従来、中学生の女子のみが風疹ワクチン接種の対象でした。その後、紆余曲折を経て、平成18年の予防接種法改正に伴い、生後12-24カ月および小学校入学前1年の男女に、風疹ワクチン接種が勧奨されています。

風疹に対する免疫を有しない女性が妊娠した際に風疹の初感染を受ければ、先天性風疹症候群発生の危険性が高いことは明らかですから、自分自身の風疹抗体の状況を把握し、積極的にワクチンで免疫を獲得しておくことが望ましいと考えられます（なお、ワクチン接種後2ヶ月間は妊娠を避ける必要があります）。

医療機関で麻疹（はしか）の診断を受けた場合は、速やかに保健管理センター（分室）に電話で連絡してください。

保健管理センター（彦根） 0749-27-1024
保健管理センター分室（大津）077-537-7709

